

読賣新聞

文化

「民芸運動」フィルムデジタル化



バーナード・リーチ撮影「日本旅行」より。右から4番目がリーチ、左端奥が濱田庄司
©Marty Gross Film Productions Inc.

黎明期の姿 リーチが撮影

無名の職人が生み出した実用的な生活道具に「用の美」を見いだす「民芸運動」の黎明期を映したフィルムをデジタル化し、公開する動きが進んでいる。提唱した柳宗悦ら先駆者の活動を伝える貴重な記録を保存し、活用を拡大することが期待される。

慣れた手つきで筆を走らせ、器肌に草花紋を描く野良着姿の女性。動きに無駄や迷いが無い。目線を上げ、カメラに向かってはにかんだ笑顔を見せた。

東京都中央区で7月に行われた民芸フィルムの上映会。

柳らと交流した英国の陶芸家・バーナード・リーチ（1875-1979年）が1930年代、栃木・益子などの民窯

を訪れた際の映像を鑑賞した。リーチがカメラで撮影した16ミリフィルムを、カナダ出身の映像作家マーティ・グロスさんがデジタル修復した。

「その時代のカメラは貴重で、（外国人である）リーチだから撮影できた」

「作品は作るものではない。毎日の生活の中から『生まれもの』」

上映会をプロデュースした能楽小鼓方人間国宝の大倉源次郎さんが聞き役となり、グ



修復作業するマーティ・グロスさん

ロスさん自ら解説した。戦前の地方都市の素朴な風景や人々の姿をいきいきととらえた映像には、後に人間国宝に認定される陶芸家、濱田庄司の作陶シーンもある。リーチに行った回想インタビューをナレーションとして加えている。

グロスさんは日本の美術や芸能に造詣が深く、陶芸などをテーマに作品を制作する過程で、70年代にリーチ本人からフィルムを託された。現在は、「民芸運動フィルムアーカイブ」として、大正期に始まった運動をたどるフィルム映像を保存収集している。活動に賛同した著作権者から素材提供を受け、関係者へのインタビューを重ねる。この日は、沖縄県の壺屋焼、大分県の小鹿田焼を扱った短編作品も上映された。

リーチが目を向けたのは、陶芸のほか和紙や染色など多岐にわたる。経年劣化で傷みやすいフィルムは、デジタル化が急務だ。リーチから託されたものを含めて手元にある約80時間分のフィルムのうち、デジタル修復したのは約30時間分にとどまる。編集済みの一部映像については英語のサイトを開設し、公開している。

失われつつある習俗や、も

のづくりの現場を伝える記録として、将来的にデータベース化も視野に入れる。「でも伝えたいのはリーチのメッセージだけじゃない。リーチが（映像を通じて）見せたかった本物（の民芸）、職人、人生とは何かなんです」
問い合わせは事務局（☎090・9330・0035）へ。（文化部 木村直子）